
GOD EATER 【The Ghost In The Rain】

謝意・ハルード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R 【The Ghost In The Rain】

【Nコード】

N3084Y

【作者名】

謝意・ハルード

【あらすじ】

某日、対アラガミ組織の花形「フェンリル極東支部」に待望の新型神機使いの候補者が「二人」招集されるという前代未聞の事態が発生した。

皮肉屋で謎の多いのヘッドホン少年「八雲 時雨」

菫色の髪を持つ幼馴染系の美少女「向坂 桔梗」

この二人の存在は後に物語を紡ぐ重要なピースとなり、また物語は彼らを歯車として加速していく事となる……かも知れない。原作のストーリーと設定をベースに捏造・改変を加え、主人公達にもスポットを当てたシリ阿斯六割、ギャグ三割、その他一割でお送りするお話でございます。

※この小説は以前断筆した「花を踏まぬ虎」より主人公達のみを用いた完全リメイク作品です。前作とのストーリーの共通点は一切ありません。

主人公（挿絵アリ）

※この主人公は原作と異なり、基本的には神機パーツの付け替えをしません。その癖初っ端からパーツの一部又は全てが高ランクの装備だったりしますが、これらは全て原作におけるランク1相当の性能を持つものとしております（要は名前と配色が同じ別物）。物語の進行に連れて性能が上がっていくといった具合です。

とはいえこの辺りはまだ曖昧なので、希望などがあつた場合は変更するかも知れません。

？男主人公

>i33786—4284<

服装⇒上／ペチュニアブルゾン上（首のヘッドフォン無し）

下／F略式下衣ブラック

テーマソング⇒「Jetpack Was Yes! v2.

0」lPeriphery」（「Icarus EP」収録曲※アレンジ前は「Periphery」収録）

本作の主人公で、アラガミとの交戦中であろうとも決して外さないヘッドホンと赤い瞳が特徴的な青年、二十歳間近にしては童顔である。最新型の「新型神機」の適合者として対アラガミ組織「フェンリル極東支部」に招待される事になった。

基本的に冷めた性分だが冷静沈着というよりはマイペースといった印象が強い。皮肉屋で常に気だるそうな態度を崩さず、面倒事を嫌っているかの様な振る舞いを見せるが、実際はお人好しの世話好き。如何なる危機的状况においても動じない強靱な精神力の持ち主でもある。

名前の由来は通り雨の別称である「時雨」より。登場人物の中では珍しく苗字、名前共に植物が由来していない。

因みに苗字の「八雲」は何重にも重なり合った雲を指す言葉。

あと服のワンポイントが（・ω・）とか（^ω^）に見えるのはきつと気のせい。

？女主人公

>i33787—4284<

服装⇒上／F強襲上衣ブラック

下／F強襲下衣ブラック

テーマソング⇒「This Close」I Flyleaf

（「Memento Mori」収録曲）

（現段階での）メインヒロイン。原作的にはどちらかと言えば彼女が主人公のポジションに当たる。

菫色の長髪と時雨と丁度対になる様な浅葱色の瞳がトレードマーク。時雨と同日に新型神機使い候補として極東支部に招待された少女、温和且つ素直で、何事に対しても真剣に取り組む優等生気質と、何から何まで時雨とは正反対な性格を持つ。その人の良さと真面目さから凜とした雰囲気が漂うが、実際は繊細でナイーブな一面も強く、孤独を嫌う寂しがり屋でもある。

名前の由来は秋の七草の一つであり、絶滅危惧種の植物「桔梗」より。桔梗の花は通常時では菫（紫）色の花卉を持つ。

あっちの（女体的な意味で）戦闘力はそれなりといった所。時雨的

には理想の女らしい。

Eat, 00 「prologue」 (前書き)

はじめましての方ははじめまして。

前作を読んでくださった方はお久しぶりです。

対リア充用ミミズ型最終兵器こと謝意・ハルードでございます。

ようやくリアルに余裕が出て来たのでGE小説書きを再開……もいい、再出発したいと思います。

また、前作を読んで下さった方々、感想や評価を書いて下さった方々、お気に入りに登録して下さった方々には作者の身勝手な理由で執筆を中止してしまった事をここにお詫び申し上げます。

相変わらず時間は掛かると思われますが、今度こそは完結まで投げ出さずに執筆していきたいと思っておりますので、よろしければ再びこのミミズ野郎の拙作の方を読んで頂けると幸いです。

Eat, 00 「prologue」

かつてその圧倒的な繁栄力でその将来を確実視されていた人類は、
今や衰退、ひいては絶滅の危機にさえ苛まれていた。

原因は、生命のサイクルの劇的な変化である。

これまでは生命の中でも最も理知的な生命、人間が食物連鎖の頂点
に立つことで、世界の生命の均衡はかなりの高次元で保たれていた。

繋がり合う命と命。これが神が望まれた世界だと、人類はそう思っ
ていた。

しかし、どうやら神はこの人類の行いを良しとしなかった様だ。

神はその鉄槌を生命の姿に変え、世界に向けて振り下ろす。

鉄槌の名は「アラガミ」

まさに荒ぶる神の如きその存在は突如として人類の前に姿を現し、そして瞬く間に彼らの全てを喰らい尽くさんと襲い掛かった。

食物連鎖の頂点に捕食本能の塊のような生命が立った事で、今までの安定した世界の循環は完全に崩壊。平行線上にあったはずのそれは即座に負の螺旋（ダウンワード？スパイラル）へと姿を変えた。

生命を喰らい、文明を喰らい、そして世界をも喰らい続け破滅への道を一直線に進むそれは、言うならば神の定めた世界の再生の過程

である。

星の、世界の再生とはそういうものだ。神にとって世界を壊す事は、芸術家が納得のいかない出来の作品を捨てることと同じである。

創るのが神の役目ならば、壊すのも神の役目だ。とでも言わんばかりに神の化身達はその強大な力を世界に見せつけ、その全てを無慈悲に喰らっていった……

しかし神は一つ重大な見落としをしていた。

世界は、その中でも人類は神に言われるがままに滅ぼされる程従順な存在では無かった、という点だ。

人間には考え、実行し、生き抜く力があつた。

目には目を、歯には歯を、アラガミには……アラガミを。

かのハンムラビ法典の理論の元で生み出されたるは神を喰らう力、「ゴッドイーター」。

アラガミを構成する超小型の生命体「オラクル細胞」をその身に宿し、同じくオラクル細胞で作られた巨大な対アラガミ兵器「神機」を軽々と振るって人々の未来を脅かすアラガミ達に立ち向かうその

姿は、この世界にとって間違いなく勇者そのものの姿であった。

神と人が互いに喰らい合う。

実に胡散臭くて馬鹿馬鹿しい話だが、この世界ではそれが世の理となりつつあった。

しかし物語の歯車はそんな悠長な結末を許さない。

それは西暦2071年、ふとした出来事を引き金に突然回り出した。

物語の舞台となるのはゴッドイーター達の根城とも言える対アラガミ組織「フェンリル」。その中でもかつての日本に存在し、組織内でも屈指の実権と実力を有する「フェンリル極東支部」である。

この支部に某日、ほんの数年前に開発され、絶対数の少ないゴッドイーターの中でも更に使い手を選ぶとされる「新型神機」の適合者が同時に2人配属されるという異例の事態が発生する。

この時より錆び付いていた運命の歯車と物語の歯車は軋みながらも噛み合い、互いをぶつけ合いながら回転を加速させていく……

杯。
|

| さあ始めよう。如何なる運命にあらうとも、精一

『Let us, then, be up and doing,
With a heart for any fate.』

ロングフェロー
】

【ヘンリー・ワーズワース・

Eat, 00 「prologue」 (後書き)

メインタイトルは日本のロックバンド「the HIATUS」の楽曲より。

主人公達の登場は次に続きます。

Eat, 01「Awakening」(前書き)

元々少ない文才、長期のブランクでところどころに粗があるかも知れませんが頑張って書きました。

要望や感想なども頂ければ幸いです。

Eat, 01「Awakening」

――夢を見るんだ。

――何時も瞼を閉じる度に、同じ夢を見る。

―――何も、分からなくなる夢を。

―――夢の中では深い霧に全てが飲み込まれていて、何もかも

が曖昧になっていく。

———目の前に何かがぼんやりと見えると思えば、何も見えな
いようにも思える。

———耳には何かノイズのような音が響いている気がしないで
も無いが、完全な静寂に包まれているようにも感じられる。

———ここが夢の世界であると今現在に至るまで知覚してい
るのに、同時にここが現実の世界であると錯覚している自分がいる。

――そんな、矛盾した感覚。

――確信できることなんて、何一つとしてない。

――自分が今、立っているのか座っているのか、それとも倒れ伏しているのかさえ分からない。

――自分が今、どんな状態なのかも全く感じ取れない。

―――それどころか、自分が今「存在」しているかさえ、
感覚がぼやけてて認識できない。

―――倒れた花瓶から水が零れ落ちる様に、自分の認識が
次々に何処かへ流れ去っていつてしまう。

―――こうして最後には何時も、自分が何者なのかさえ分
からなくなっていくんだ。

――…あ、
違うか。

―――毎回、夢の終わり際になって思い出す。

―――何も分からなくなっていく中、最後に一つだけ気付かされるんだ。

――― 在るかどうかも分からない地を打つ音と、在るかどうかも分からない身体を伝うこの感覚。

――― ほかの事は全て霧にかき消されるのに、この事だけ

ははつきりと分かるんだ。

『……………雨が、降ってる。』

こうして夢の主――八雲
時雨は目覚めの時を迎える。

【Eat, 01「Awakening」】目覚めの時

——— 某日、フェンリル極東支部 第六ブロック 適合者管理
エリア D 区間

「……あ……？……丈夫……え………るの！？」

(……ン……あ?)

聞き覚えの無い女性の声で、部屋の隅のベンチで眠りこけていた時雨の意識は現実へと帰還した。

声は両耳のヘッドホンから流れる歪んだギターサウンドに紛れて聞き取りづらい。

襲い来る倦怠感を撥ね退け、うつすらと瞼から紅色の瞳を覗かせる。目が覚めても、思考は未だ正常に作動しない。

(あー……寝てたのか、俺……)

おぼつかない動作で上着のポケットに突っ込んだプレイヤーの電源を切り、一間置いて思考回路の回復を待つとようやく視界を遮っていた靄のようなものが晴れた気がした。

「あ、やっと起きた…大丈夫? うなされてたみたいだけど……。」

それとほぼ同時に、先程聞いたものと同じトーンをした女性の声が

時雨の耳に入る。透き通る様な声質で、可愛らしさと艶やかさを併せ持った実に女性らしい声だ。

「ん…ああ、大丈夫……。」

時雨が言葉を返ししながら少し頭を上げると、彼の眼前に声の主である女性の姿が映し出された。

歳は時雨と同じくらいだろうか。

女性は整った輪郭と大きな浅葱色の瞳を持ち、どちらかと言えば綺麗と言うより可愛いといった印象の強い、所謂「美少女」と言っても差し支えない容姿をしていた。

特に目を惹くのが頭髪であった。見事なまでに美しい菫色の長髪を持ち、それを左側頭部でポニーテールにして纏めてある。

その肉体も時雨の素人目から見ても非常に整っており、主張しすぎず謙虚すぎない、女性としての繊細さが全面に押し出されたスタイルを持っている。両肩と腹部を露出させた服装も手伝って、その姿からは相当の色香が漂っていた。

（おおう、こりゃあ目の保養になるな……にしてもいい具合の美乳だ…。）

酷く俗っぽい独り言が口内にまで登って来たが、慌てて言葉を奥歯で噛み砕く。

「ここにいてるって事は……アンタも『候補者』って事か？」

時雨はばつが悪そうに頭を掻きながら、少女に答えの解かり切った問いを投げかける。

時雨たちがいる第六ブロックはフェンリルにゴッドイーター候補者と判断された人間がまず初めに入れられるエリアであり、A、B、C、D、Eの5つの区間で成り立っている。このうちA～Cの三区間は適合試験を受ける前の健康診断や血液検査等を行うエリアであり、休憩所の役割を持つD区間を挟んでゴッドイーターに値するか否かを判断する適合試験の場であるE区間が存在している。

時雨たちは事前の検査を全て終え、検査結果の分析と適合試験の準備完了の数時間をこのD区間で待機している所であった。

「勿論、ついさっき検査が終わった所だよ……確か私がここに来たときにはキミはもう寝てたかな。」

怖い夢でも見てたの？と少女が少し不安げな表情を浮かべ、ベンチに座った時雨を覗き込む様にして続ける。それに対して時雨は一度クスツと笑みを作った後「まさか」と呟きながら少女に対して呆れのポーズをとっておどけて見せた。

「……っと、そういえばまだお互い自己紹介してないよね。」

少女は束の間の沈黙を断ち切るようにして身体を戻すと、時雨に向かって右手を伸ばしてきた。

「私は『向坂 桔梗』。同じ日に入隊する同期って事で一つ、よろしくね。」

少女――桔梗はそう言って時雨に屈託の無い笑顔を見せる。

「…八雲 時雨だ。よろしく、桔梗。」

こちらは仏頂面のまま、桔梗の右手に自身の右手を重ねる。

すると桔梗の右手が時雨の右手をがっちりと捉え、そのまま何度も上下に振り回した。

……正直、ちょっと痛い。

「……………随分、嬉しそうだな。」

「え？あ、うん……やっぱりこういうのって、一人だと寂しいって
いうか……なんていうか……」

苦笑いを浮かべる時雨を見て桔梗は慌てて彼の右手を解放すると、目を泳がせ恥ずかしそうに頬を掻いた。

桔梗が実際にどう思っているかは時雨には分からなかったが、彼女もまた有無を言わず連れて来られ、たった一人で検査に次ぐ検査を強制されて来たのだ。普通の女の子ならば事の大小はあれど不安に駆られるものなのだろう。ましてやこれからいつ命を失うかも分

からない戦場に駆り出される身になるのなら尚更だ。

それが自分がただここにいてだけで少しでも解消されたという事実
に、何だかんだで時雨は満足感を感じていた。

時雨にとっても桔梗は、そして桔梗にとって時雨はこの極東支部で
始めて出会った友人であった。

「……………にしても、いつまで待たせる気かねえ……………」

「ホントにね……………」

時雨と桔梗が顔を合わせてから凡そ1時間、他愛のない雑談で暇を
潰していた二人であったが、適合試験へのラブコールは一向に送ら
れる気配がない。

「二人とも検査で落とされたりしてな。」

「アハハ、本末転倒って奴だ。」

皮肉っぽく笑う時雨に桔梗が続く。

結局、事が動き出したのはあれから更に1時間ほど後の事であった。

室内に響き渡るポップなアナウンス音。

落ち着かずに一人室内をうろついていた桔梗も、ちょうどトイレか

ら出て来た時雨も一斉に音のするスピーカーに視線を移す。

『大変お待たせしました。番号667「向坂 桔梗」様。適合試験の準備が完了しましたので、手前のゲートよりE区間へとお進みください。なお番号666「八雲 時雨」様は引き続きその場でお待ちください。繰り返します……』

エコーがかった女性の業務連絡が淡々と繰り返される中、空調音と共に二人の眼前にある巨大なゲートが開いた。再び待機を指示された時雨は深いため息をつき、ついにお呼びのかかった桔梗は呆気にとられていた。

「冷やかしかい……。」

「わ、わわ私が先！？ 検査は時雨の方が早く済んだ筈じゃ……？」

桔梗の声は緊張からか震えている。遅いだなんだと愚痴を零してはいたものの、いざその時が来てしまうとやはり不安に怯えてしまうものらしい。

「分析が難航してるって事だろ。こりゃ割と本気で失格って事もありうるな……。」

時雨はスピーカーを少し睨んで再びため息をついた後、桔梗の方を見る。

桔梗はおどおどした様子で周りを見渡したり、唇に指を当てたりと落ち着きがない。

「桔梗？」

「きゃわッ！！？」

見かねた時雨が後ろから声をかけると、桔梗は素っ頓狂な声を上げて体全体を跳ね上げた。尚もそわそわと動きを止めない様子に時雨は「ダメだこりゃ」と頭を抱える。

「桔梗？顔こっち向けて、落ち着いて。」

「ふえ…？」

突然の時雨の申し出に混乱するも桔梗はそれに従って緊張で表情の固まった顔を身体ごと時雨の方に向ける。

「あーそうそう、はい息吸ってー…」

「(すうすう)」

「はい吐いてー。」

「(はあ〜)」

「また吸ってー…」

時雨に言われた通りに深呼吸を繰り返す。何とも原始的な緊張のほぐし方であったが、何度も繰り返す内に桔梗の心には幾分かの余裕が生まれてきた。

「……少しは落ち着いたら？」

「……う、うん。ありがと……。」

平静を取り戻した桔梗は少しうつむいたまま時雨に礼をする。その顔は恥じらいで赤く染まっていた。

「…すごいね、時雨はさ。」

「何が？」

「全然慌てたりしないし、私なんかよりずっと大人だなーって……。」

「どうだかな……っと、そろそろ行けよ。あんまり遅れてお偉いさん方を怒らせるのもアレだろ？」

時雨が目をやった先には開いたゲートと、それに続く長い廊下が見えていた。この先がいよいよ本当の目的地であるE区間……即ち試験会場である。

「ん…それもそうだね。じゃあもう行くよ。」

そう言って桔梗はゲートに向かって歩き出す。その後ろ姿からは気品と力強さを感じられ、先程までのか弱い少女の姿はどこにも見えなかった。

「時雨！」

「ん？」

ゲートを超える所で桔梗が一旦止まり、振り返って時雨を呼ぶ。その表情はとても穏やかで暖かいものであった。

「先に行ってくるよ。また後でね！」

時雨が軽く掌を見せて答えるのを見た後、桔梗は再び前を向いて奥へと続く道を駆け出した。

桔梗がゲートを過ぎて数歩進んだ所で自動で扉が作動し、腹部に響く轟音と共に門が閉じられる。それからもしばらくの間、金属製の床を足で鳴らす音が部屋まで響いていた。

桔梗を見送り、時雨は深く息を吐きながら側の壁に寄りかかる。

「……面白い奴。」

ヘッドホンからは、再び音漏れが聞こえ始めていた。

Eat, 02「Deus ex machina」(前書き)

ぬおお、昨日大学の連中とカラオケでハッスルしたせいか喉が痛い
(; ; w ; ;)

作者は基本一話4000字前後の長さで執筆してるのですがどのくらい
の長さが皆様には読みやすいのでしょうか…?

では第二話、ご覧ください。

Eat, 02「Deus ex machina」

桔梗がこの部屋を出てからどのくらいの時間が過ぎた後の事だろうか。

D区間のスピーカーから再び呼び出しのSEが鳴り響く。

音楽プレイヤーの電池も底を尽き、余りの静寂に再び眠りに着きかけていた時雨の上部が勢い良くスピーカーの方に向かって起こされた。

『大変お待たせしました。番号666「八雲 時雨」様。適合試験の準備が完了しましたので、手前のゲートよりE区間へとお進みください。繰り返します…』

先程の放送と何ら変わり無い呼び出しのアナウンスに続いて、時雨の眼前のゲートが鈍い音を立てて開放される。

「やっとか……」

ベンチから腰を上げると、時雨はゆっくりとした足取りでゲート奥の廊下を進んでいった。

【Eat, 2「Deus ex machina」】
機械仕掛けの神

廊下の突き当たにあったこれまた巨大な自動ドアを過ぎると、休憩所であるD区間より一回りも二回りも広い大部屋——E区間がその姿を現した。照明が弱いのか、少し薄暗い。

時雨の後ろで扉が閉まる音が聞こえたのとほぼ同時に部屋の電気が一斉に強くなり、一瞬にして室内全体を照らした。その眩しさに時雨は手で顔を抑える。

「（うおっまぶしっ。）」

目が慣れてきた所で時雨は辺りを見渡し、部屋の細かな情報をその赤い瞳に映して記憶する。

周囲の壁には弾痕や何か鋭利な刃物で斬りつけたと思しき刀傷が散見しており、何らかの激しいやりとりが発生した事がおぼろげながらも伝わってくる。

とはいえ流石に血痕や異臭といった直接的なものは見当たらない。その事実到时雨は取り敢えず胸を撫で下ろした。

そして部屋の中央に何かプレス機の様な機械が置いてある事に気付く。それが何かを確かめようと時雨が歩を進めた瞬間、声が聞こえてきた。

『長らく待たせてすまない。』

「（ホントだよ。）」

声の出先を確認するよりも前に時雨は能天気になんか突っ込みを入れる。

足を止めて再び周囲を確認すると部屋奥に上階から監視する為の窓が設置されており、その向こう側には数人の人影が見える。どうやら話しているのは中央に立つ人物のようで、体格や声質から男性である事までは分かるが容姿は窓がぼやけていて確認できない。

『さて：ようこそ、人類最後の砦「フェンリル」へ。今から対アラガミ討伐部隊『ゴッドイーター』としての適性試験を始める。』

力強い声色で淡々と事務的な言葉が述べられる。その言葉を聞くやいな時雨は無言で部屋中央のケースへと歩を進めた。

『：フフ、迷いは無し、か。君にはいろいろと期待が出来そうだよ。』

語り口に変化は見られないが、その声には歓喜に近い感情が聞いて

取れた。

機械の目の前で足を止めると、いよいよその全貌が明らかになる。

機械は上下に分離しており、いかにも何かを挟むための様相を成していた。下部の方には何やら半月型の赤いリングが装着されており、どうやら此処に手を掛けるらしい。

そして何よりも目に付くのがリングの先に堂々と置かれている巨大な剣の様な武具——即ち神機である。

それは青を基調とした色合いを持ち、かつてこの極東の武人が愛用した「刀」を模した刀身が装着されていた。他にも大砲や盾と思しきパーツも見られ、何とも欲張りな武器だなど時雨は溜息を漏らす。

『では、準備が出来次第その武器の柄を持つようにしてケースに右手を掛けてくれ。』

言われるがままに右手首を赤いリングに掛け、神機の柄を握り締める。容易に想像できるこの後の出来事を思い、時雨の表情は少しだけ歪む。

そして数秒の間を置いた後、ケースの上半分が時雨の右腕を押し潰すようにして落下した。

「ぐうつ……ッ!!」

それと同時に時雨に今まで感じたことの無い程の激痛が襲い掛かる。痛みは右腕の神経を焼き切る様な速さで脳髓まで駆け抜け、それと同時に時雨は右腕から何かが蛇の様にしてぬるりと身体に入り込んでいく感覚を覚え、底知れぬ悪寒を感じた。

右腕を左手で押さえるも激痛と不快感は全く引かず、砕けんばかりの力で奥歯を噛み締める。

体中に根を張られていく様な感覚。この得体の知れない恐怖に、時雨は強烈な吐き気を覚えたが何とか喉奥で嘔吐を止める。

永遠に続くように思われた痛みと悪寒だったが、実際の時間にして約五秒、それは時雨の身体から一瞬にして消え去った。

それと同時に何やら黒い煙を吹きながら再びケースの上半分が持ち上げられた。

痛みと悪寒の消滅で時雨は我に返り、顔を上げてケースの下敷きになっていた右腕をふと見る。

右手首には先程見た赤いリングが丁度上下に重なり、腕輪のようになって装着されていた。腕輪というには少々図体が大きかったが、特に異物感や圧迫感を感じられない。

「：おお、カッケェー。」

右腕を挙げるとそれに連動して神機はいとも簡単に持ち上がる。時雨は自分がまるでおとぎ話の勇者になったかのような錯覚を覚え、大人げも無く興奮していた。

『おめでとう。これで君も晴れて我々の仲間入りだ。尚この後は適合試験後のメディカルテックが予定されている。指示があるまで指定された場所で待機していてくれ。』

試験の終了を告げる男の声が部屋に響き渡った。

《あの「試作品」に適合する者がいるとはな……素晴らしい逸材だ》

当然、男の心中の眩きは時雨には届く筈も無かった。

「おーす。」

「あ、時雨！遅かったね。」

研究員に案内され、エレベーターに乗った先はエントランスと思われる広間だった。エレベーターを降りて直ぐ左手のベンチに座っている二人の内、手前に座っていた桔梗に声を掛ける。

「ああ、にしてもキツイ試験だった。」

「だよねー。私ちょっと涙出ちゃったかも……」

「…やっぱり見かけどおり泣き虫なんだな、お前。」

「な、何よー！」

「お、アンタが桔梗の言ってた『八雲 時雨』かい？」

少し雑談をしていると、桔梗の直ぐ横に腰掛けていたニット帽を被った少年が話しかけてきた。時雨よりは年下に感じられ、まだ幼さが抜け切れていない年頃に見える。

「ん？ああ、そうだけど…アンタは？」

「オレは『藤木 コウタ』、桔梗とはさっき知り合ったんだ。あ、それとオレのほうが先に試験終わったからオレのが先輩ってことでよろしくな！」

「先輩、女の子の前で社会の窓全開っスよ。」

「え！！？」

「嘘ッス。」

「こ、このヤロォー！！」

「アハハハ、コウタ面白い。」

他愛も無い会話で盛り上がっている中、時雨はハイヒールの音が近づいてくるのに気付き、目だけを動かしてそちらを見る。

「（……お、おおう…これはヤバイだろこれは……いろんな意味で。）」

そこにはたわわな胸を惜しげもなく引き立たせ、純白の衣装に身を

包んだ女性の姿があった。

「立て。」

「「え？」」

突然の高圧的な口調にベンチに座っていた桔梗とコウタの目が点になる。

「立てと言っている。立たんか!!」

より一層怒気を強めた女性の発言に気圧され、あせあせと二人が立ち上がる。初めから立っていた事で難を逃れた時雨はそれを我関せずといった様子で傍観していた。

「（おっかねえ姉さんだなあ。）」

「貴様もこっちを向け!!」

結局、時雨も怒号を浴びる事になった。

「これから予定が詰まっているので、簡潔に済ますぞ。私の名前は『雨宮 ツバキ』、お前たちの教練担当者だ。この後の予定はメデイカルチェックを済ませた後、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらう。今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまらないこ

とで死にたくなければ、私の命令には全てイエスで答えろ。いいな？」

「…は、はあ。」

「ええ？ えつと…ええつと…」

「あわわわ……。」「

女性——ツバキは三人に一切の介入を許さずただひたすらに要件だけを伝え、同意を求めてきた。

この突然の事態に時雨は眉をしかめ、桔梗はオドオドと二人を見渡し、コウタは自分のキャパシティを超える情報量に目を回している。

「わかったら返事をしろ！！」

「「は、はいっ！！！！」」

「い、イエス、ママ……」

再三の怒号に、一人を除いて気合の入った返事が返った。

「…では、早速メデイカルチェックを始めるぞ。」

そう言ってツバキは手にした資料と3人を品定めする様にして交互に見つめる。

「（こ、こえゝ…なんつーか、まさに鬼教官！って感じだな…）」

「（ああ…でも鬼なのは性格だけじゃないな…あのボディは反則だぜ反則…）」

「（た、確かに…ゴクリ…）」

アイコンタクトで具体的すぎる意思疎通を図るコウタと時雨。その内容は何とも浅はかで短絡的ある。

「（桔梗と比べても…スゴいな…）」

「（正直、コイツと比べるのはあまりに格が…まあでも俺はこのくらいがちょうど…）」 「ゴフッ!!」 「」

一斉に桔梗の方を向いた男二人のみぞおちには、渾身のボディブローが叩き込まれていた。

「……では先ず、八雲 時雨。お前からだ……どうしたお前ら、体調が優れないのか？」

「い…いえ、大丈夫っス……」

腹を抑えて悶絶したまま時雨は必死に声を絞り出す。コウタは何やら解読不明なうめき声を上げたまま動こうとしない。

「……そうか。では、一五〇〇までに『ペイラー・榊博士』の研究室まで行く様に。なお今後の予定は一六〇〇には藤木コウタ、一七〇〇には向坂桔梗のチェックが予定されてる。後、三人ともそれぞれの時間までの行動は自由だ。それまでこの極東支部、通称アナグラを回って見てくるといい。」

先輩達には挨拶の一つもしておく様にと付け加え、ツバキはその場を後にした。

「き、桔梗…やるにしてももう少し手加減ってやつを…おおう…」

「知らないッ!!」

コウタは未だに腹の激痛に悶え苦しんでおり、産まれたての子鹿の様に足をガクつかせていた。桔梗の方は正に怒り心頭に発するといった様子で、時雨と目が合うやいな涙目になりながら殺意の籠った視線を送ってくる。

「(……何もそんなに怒ることないじゃん……)」

この後時雨はコウタとあの手この手で桔梗をなだめ、機嫌を直すのに自由時間の殆どを使い切ってしまった。

Eat, 02「Deus ex machina」(後書き)

時雨から漂うチートオーラ……果たしてどうなるのやら。

それにしてもこの時期は買う予定のゲームが多くて財布が軽くなります。

もちろんゴッドイーター2も購入予定です(^ω^)

Eat, 03「Wolves At The Gate」(前書き)

大変お待たせしました、ミミズ野郎こと謝意・ハルードです。

ううむ、なかなか話が進まない……筆も進まない……時間だけは進みまくる……

第三話、ご覧ください。

Eat, 03「Wolves At The Gate」

「あ、時雨！そろそろ時間なんじゃない？」

「んあ？……まだ早いんじゃないか？」

桔梗に諭された時雨が面倒くさそうに首を上げると、エントランス奥に設置された巨大な時計が見えた。

針はそれぞれ時計が？と？の表記の間を、分針が？の表記を指している。

時間にして十四五〇（14時50分）、時雨のメデイカルチェックまではあと10分を切った所であった。

「何言ってるのさ！こういうのは指定された5分前には到着してるのがマナーでしょ！？」

「あー、分かった分かった……たたくお前は俺のかーちゃんかよ……」

少し痒くなっていた頭を右手で掻きながらゆったりと立ち上がると一瞬目眩がしたが、足のつま先に力を入れてバランスを保つ。

「おいおい、大丈夫かよ？」

どこか気の抜けた時雨の様子を見てベンチに座っていたコウタが声を掛ける。

「……少し疲れたかもな…誰かさんの鬼の角を引っ込めるのに苦労したし。」

「ハハハ、確かにね！」

時雨がコウタの方に身体を向き直して呆れのポーズを取ると、コウタの笑い声がエントランスに木霊した。

「誰が鬼ですって？」

「イエ、ナンデモアリマセン。」

男子二名の表情が恐怖に凍り付く。桔梗の両手が、コウタと時雨の頭をがっちりと捉えていた。

e | 【Eat, 03 Wolves At The Gat
」 | 開かれし狼門 |

「……で、『榊ハカセの研究室』って……どこだ?」

ふと思い立った様に時雨が桔梗とコウタの方に振り返る。右頬には先程桔梗に抓つねられた際に出来た腫れぼったい赤みが浮き出ており、コウタの左頬にも同じ傷が確認できた。

「…桔梗、どこか聞いている？」

「き…聞いてなかった……」

軽い焦燥の念を含んだコウタの問いに桔梗が気まずそうに答える。

極東支部——即ちアナグラ内はかなりの規模と区間数を持ち合わせており、とても探検気分で闇雲に一つの部屋を探そうという気にはなれそうもない。

加えて現時点でエントランスには時雨達以外の人影は見当たらず、眼前の受付らしき空間にさえ人の姿が認められない。

全体図等の案内施設も見当たらず、このエントランスには見事なまでに目的地までの情報が存在していなかった。

「……こりゃあ初っ端から…やっちゃったかな？」

「な、何諦めの境地に入ってるのさ!!?」

まるで他人事のように時雨が半笑いで遠くの方を見つめる。そのあまりの動揺の無さに桔梗は盛大な呆れと少しの苛立ちを覚えた。

「なんつーかお前、ホントに肝が据わってるよな……遅刻なんてしたらさっきの……ええと、ツバキさん? に何言われるか分かったもんじゃないぞ?」

「むう、そいつは困るな。」

「全っ然困ってるって顔じゃねー……」

これには楽天家のコウタも、呆れが礼にくるほどの溜息を漏らすより他無かった。

「…お、エレベーターの音だ。誰か来るのか?」

桔梗とコウタが時雨の病的とも言える能天気ぶりに心底呆れ返る中、当の本人は部屋の僅かな変化を感じ取る。こういった鋭敏さは時雨

の持ち味であったが、どういうわけか彼はその特性を自身の性分に全く反映出来ていない。

床から僅かに響く機械音と足裏に感じる微量の振動を感じる。殆ど直感に近い情報を頼りに目線を動かして音の先に視界を移すと、現在地から短い階段を上った先であるエントランス上部に大きめの鉄製の扉を持つエレベーターが設置されていた。

ゴウン、ゴウンと大規模な機械が稼動している際に発生する独特の重低音が下から上に大きくなっていく。これはこの施設の下層部から此処に向かってエレベーターが起動しているという事——つまり人は人が乗っているという事だ。

最も、この段階では搭乗者がエントランスで降りるという確証などどこにも無かったのだが。

研究室までの道のり程度なら、ここの関係者なら誰でも知っている筈だ。

そう時雨達は僅かな期待を込めてエレベーターの扉を見守る。この頃になると可動音もそれなりの大きさになっており、桔梗とコウタもその存在に気付いていた。

「おっ。」

期待は時雨達を裏切らなかった。

エントランスにチャイムの様な甲高いSEが短く鳴り響く。

それから一旦の間を置いて二重に重ねられたエレベーターの扉が一枚づつ開かれると、時雨達の視界には一人の人影が飛び込んで来た。

人影の正体は女性であり、赤みがかった髪と大きな瞳が人目を引く少女であった。

比較のカジュアルな服装の時雨やコウタと比較するといかにも「制服」といったイメージを持った服装に身を包んでおり、それは戦闘向けにスマートなデザインに作られた桔梗の着ている制服とも根本的なコンセプトが異なっている様に見える。

脇に大量の資料ファイルと思しき物を抱えている事と口元に付けたインカムマイクから、ここの受付嬢の一人なのかと時雨は推測した。

「あのー。」

少女が下階に下りようと足を階段に乗せたところで時雨は彼女に声をかけた。それとほぼ同時に少女はこちらを認識したようで、正面の時雨から順に桔梗、コウタと視線を流すと口元に営業スマイルを浮かべた。

「ああ！新しい人達ですね！！私、この支部のオペレーターを務め

ております「竹田 ヒバリ」と申します。ここについて分からない事があつたら何でも質問してください!」

「え、じゃあ早速スリーサイズ…じゃねーや。ハカセの研究室ってどこにあるんスカ?」

背後に殺気を感じたので下賤な問いを慌てて正す、桔梗はこういう類の冗談が通じない人物のようだ。

「(スリー?) 榊博士の研究室でしたらそのエレベーターでここから四階下の「ラボラトリ」まで降りてもらった後、真っ直ぐに進んだ突き当りの所にあります…あ、これこの支部の全体図ですのでよろしければどうぞ。」

「どうも。」

ヒバリから人数分の地図を渡され、それぞれ桔梗とコウタにも配る。支部全体は予想通りかそれ以上に広大で複雑な様相を成しており、施設案内の項だけ取っても目を回してしまいそうな情報量であつた。

「研究室はさっき聞いたから……あの、私達の個室ってどこになるんでしたっけ?」

「うわーやっぱ広いねえ! あ、ヒバリちゃん! この部屋なんだけど……」

パンフレット形の案内図を片手に若干興奮気味の桔梗とコウタがヒバリに質問を浴びせる。次々に飛び出す疑問に戸惑うことなく返答していく辺り、流石オペレーターだと時雨は内心感心した。

「……っと、場所も分かったことだしそろそろ行かないとな。」

時は進み、メディカルチェックの時間まであと五分となっていた。

「ここか……」

ヒバリに言われた通りに進んだ結果、時雨は目的地であると思われる研究室の扉前に辿り着いた。

周囲にはかなりの規模を持った病室や薬剤保管庫なども散見され、このエリアが研究施設の他に医療施設も兼ねている事が分かる。

「まあ、軍人業だし当然と言えば当然か……」

時雨は一度大きく伸びをして身体の節々を鳴らした後、扉を開閉するセンサーに手を近づけた。

可動音と共に扉が素早く持ち上がり、時雨の視界から消える。

それから一瞬の間を置いて何とも言えない芳香が時雨の鼻腔を通り抜けた。

これは所謂「和」の趣を持った香りであったのだが、過去の生活に置いて風情の嗜好などとは無関係であった時雨にその事が理解できる筈もなく、主張の激し目な匂いに時雨は少し顔をしかめる。

部屋全体も今まで訪れた施設とは明らかに雰囲気^{かも}が異なり、くすみを孕んだ独特な色を持ち、若干異様な耽美さと気品を醸し出してい

た。部屋奥に設置された巨大な機械群や周囲を走るコードなど「研究室」としての部分が非常にミスマッチである。

そして部屋奥には二人の人物の姿。一人は眼鏡をかけた狐目の男性であり、先程から複数のモニターに囲まれながら十指を高速でキーボードに打ち付けている。そしてもう一人である金髪の男性は、一心不乱にデータを入力する狐目の男性の様子を鋭い瞳をもって観察していた。

「ふむ：予想より726秒も早い。よく来たね「新型」くん。」

目をモニターに向けたまま狐目の男性が時雨に声を掛ける。金髪の男性も時雨の存在にはすでに気付いていた様子であり、特に驚きもなく時雨の方へと身体を向けた。

「（時間ギリギリで726秒早いつて……俺が10分以上遅刻する予想してたのかこのオッサン……）」

二人で賭けでもしてたのか、と邪推した時雨は少しの苛立ちに目を細める。そんな時雨の様子を無視して狐目の男は言葉を繋げた。

「私は「ペイラー・榊」。アラガミ技術開発の統括責任者だ。以後、君とはよく顔を合わせることになると思うけどよろしく頼むよ。」

「ええ、よろしく。」

目線だけを動かして互いに軽い会釈を済ますと、榊はすぐさまモニターに視線を戻した。

「……さて、と…見ての通りまだ準備中なんだ。ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

榊の言葉にヨハンと呼ばれた金髪の男性がピクツと反応する。その表情には現在の時雨と同じように呆れ九割、苛立ち一割な感情が浮き彫りにされていた。

「榊博士、そろそろ公私のけじめを覚えていたきたい。」

少しの間を置いて、金髪の男性が榊に嫌味たっぷりのアドバイスを与える。一方の博士はそれに対してヘラヘラと笑いながら平謝りを繰り返していた。

この間時雨はというと、金髪の男性の声に聞き覚えがあると一人記憶を遡っていた。

———確か、あの声は……………

「…あ、適合試験の時の人っすか。」

「…フフ、覚えていてくれて光栄だよ。…さて、適合テストではご苦労だった。私は「ヨハネス・フォン・シックザール」。この地域ののフェンリル支部を統括している。改めて、適合おめでとう。」

君には期待しているよ。とヨハネスは微笑みを顔に貼り付けながら時雨に語りかける。しかしその眼光はなおも鋭く時雨を射抜き続けており、並大抵ではない威圧感を持っているように感じられた。

「彼も元技術屋なんだよ。ヨハンも「新型」のメデイカルチェックに興味津々なんだよね？」

「…あなたがいるから、技術屋を廃業する事にしたんだ…自覚したまえ。」

「本当に廃業しちゃったのかい？」

「…フツ…まあ確かに興味はある…何せ彼はあの神機の適合者なのだからな。」

この時、時雨は彼らの他愛もない会話の中に違和感を感じ取った。両者とも笑顔を見せてはいるものの、その会話の中には何か張り詰めた空気が漂っている。互いの視線が、互いを射抜くようにして向けられているのだ。

しかしその「何か」を自分が理解することが不可能であることは時雨にも分かっており、そもそも理解する必要が無い。そして自分のことを悪く言われている訳でもなく、むしろどういう訳か賞賛されている。

彼らの会話に切り込むこと自体が無駄である事を悟り、時雨は先ほどのまでの違和感に関しての考察を打ち切った。

その後、時雨はここ極東支部の支部長であるヨハネスから様々な説明を受けた。

説明の概要は主にフェンリル全体の目標と時雨の配属部隊について絞られており、途中何度か解析中のデータの数値に驚愕する榊の邪魔が入ったものの解説は滞りなく行われた。

まず初めに説明を受けたのは、時雨の配属が決定されている「第一部隊」は主に極東地帯一帯のアラガミの排除、及び素材の回収の任を任されているという事であった。「主に」というのは神機使いはどの部隊でも恒久的に人手不足の状態であり、複数の部隊間を通じての人での貸し借りがほぼ毎回の任務で行われているという事情が

あつての表現ある。

事務員や調査隊員達が至る所に張り巡らせた情報網を利用して迅速にアラガミの存在を察知、確認し、極東支部きつての精鋭部隊である第一部隊の神機使いたちはこれらを殲滅すべく現地に赴く。

そして激闘の末に討ち滅ぼしたアラガミから彼らの生態の核を成すオラクル細胞の集合体「コア」を回収し、無傷の状態で支部へと持ち帰る事が任務として課せられているのだ。

数多くの業種が存在するフェンリルの従業の中で最悪の死亡率を誇る神機使いの内でも特に大きな危険を伴った任務であり、それゆえに隊員には相当の素質を持つ物が選任され、その報酬、生活水準もかなり優遇されたものとなっている。

とどのつまり、第一部隊に配属される。という事実そのものが誉れ高い事なのであり、上層部から素質をより大きく認められているという何よりの証なのであった。

こうして回収されたコアは支部お抱えの研究員、整備員達によって加工されて様々な分野において貴重な素材となり、純度が高く損傷が少ないものはこれから生まれる新たなゴッドイーターの為の神機として改造される事になる。

しかし現在はそのコアの大部分をある計画の為に利用しており、この計画こそが極東支部、ひいてはフェンリル全体の目標でもある「エイジス計画」である。時雨が受けた説明の二つ目はこの計画についての簡単な説明であった。

ヨハネス曰く「エイジス計画」とは、この極東支部沖合の旧日本海溝付近にアラガミからの脅威を完全に廃した「楽園」を築くための計画であり、その為には多種多様なアラガミのコアの存在が必要不可欠であるという。

計算されているコアの必要数は生半可な個数では無いらしく実現は困難を極めるとされているが、この計画を完遂する事が出来た暁には人類は当面の間絶滅の危機から脱する事が可能であるとされている。

当初は眉唾な話であるとし時雨は鷹を括りながら説明を聞いていたのだが、計画について語るヨハネスの語り口には何やら決意に似たものが感じられ、一端に疑いを持つのは憚られるようになっていた。

人類を未来へと導く、平和の礎。

希望はあるにこしたことはない、時雨は捻くれ気味ではあるが肯定的に解釈することにした。

「…ふむ、では話は以上だ。ペイラー、後はよろしく。終わったらデータを送っておいてくれ。」

そう榊に伝えるとヨハネスは部屋を後にする。榊は軽く手を振りながら彼の後姿を見送ると、忙しくタイピングに動かしていた指を止

めた。

「……よし、準備は完了だ。そのベッドに横になって。」

現在に至るまで片時も目を離さなかったモニターからもようやく意識を外し、悪戯っぽい笑みを時雨に向けた。指示された先には、大量のコード類が繋げられた無骨なベッドが用意されている。

「（……あれ、さっきこんなベットあったか？）」

「少しの間眠くなると思うが、心配なくていいよ。次目が醒める時は自分の部屋だ。」

時雨は自分の方に向けて指を先ほどのタイピングの様な速さでわきわきと動かす櫛に若干恐怖を覚える。同時に何故か肛門に強烈な疼きも感じたが何故かその事に関しては知ってはいけない様な直感に襲われ慌てて思考を停止した。

「戦士の束の間の休息というやつだね。予定では10800秒だ。ゆっくり お・や・す・み♪」

「……ういーっす……」

櫛は本当に嬉しそうな表情で時雨をベットへと促す。非常に気乗りしない時雨であったがしばらくして逃げ場が無いと観念し、渋々ベツドの上に体を横たえた。

少し固めの枕に頭を置いた瞬間、強烈な眠気に襲われる。全身に憑き物が乗り移ったかの様な感覚を覚え、両の瞼まぶたの重量が何十kgも跳ね上がったかの様に思えた。

「（わー、これスゲえ…なあ…一体…ん…技じゅt…）」

一切の抵抗も許されず、時雨の意識が手からするりと抜け落ちる。両目の隈くまを晒しながらすやすやと寝息を立てる彼の姿は実に幸せそうな表情であった。

時雨の意識が途切れた事を確認すると、榊が椅子から重い腰を上げた。

そのまま眠りにつく時雨の傍まで歩み寄り、彼の頭にそっと右手を置く。

「ヨハンが出て行ってくれて助かったよ。彼に知られると色々面倒なことになるからね……」

一度口角を怪しく釣り上げると、榊は時雨から手を離し、再び席へと腰を下ろした。

Eat, 03「Wolves At The Gate」(後書き)

榊が妙に変態チックに……ファンの皆様には申し訳ない(・ω・
)

そういえば前回の感想を下さったYOUVCut様より

>「時雨先輩チッスチッス！」

>大物オーラまじばねえっす！

>先輩まじリスペクトっす！」

>…こんな感じに挨拶して叩きのめされたい。

とのコメントを頂きましたので

>i36272—4284<

……申し訳ない、ただヤリタカタダケーです orz

次は早く更新できるように頑張ります(・ω・)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084y/>

GOD EATER 【The Ghost In The Rain】

2011年12月2日19時46分発行